

望郷

明治女性史

夫止切八



への時代

へ実説楠木正成



明治の政治がなつて脚光を
 明かした楠公が今日では悪
 党扱いかい……樟神の何故
 な代出た……切山大神根氏
 別所だ……身若者とと庶民
 の窮乏を救わんと帝と物の
 安売りにまてしとての
 交わりを初めとてしとての
 あら方に初めとてしとての
 明らかに入す……四〇〇篇
 上製箱に入る

グリーン

黙示録

ポルトガルのスピノラ
 革命政權樹立の前夜、
 アフリカ有色人革命派
 やアラブゲリラにまき
 こまれた日本人ゴルフ
 アーの殺人事件……。
 「バー・ゴルフ」創刊号
 以来連載九〇〇枚の八
 切止夫の珍しい推理長
 篇……。写真二〇枚入
 三二〇頁 一九八〇

望郷明治女性史

著者 八切止夫

発行者 矢留 的

印刷 日本製版 KK 製本 日製バインダリー

発行所 東京都中央区日本橋蠣殻町 2-20 日本シェル出版
 日本 シェル ター (株) 内

☎ 664・5040 668・1974 666・9912

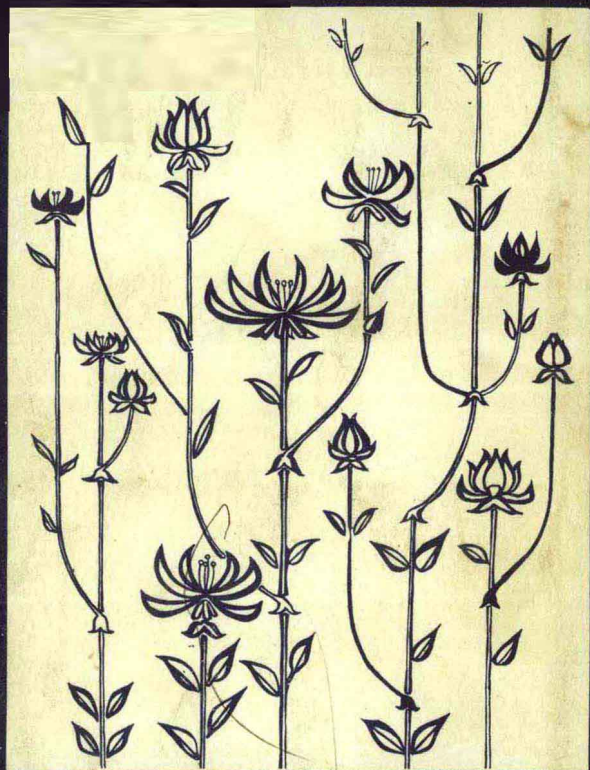
振替 東京 112231 〒103

望郷

夫止切八

明治女性史





目次

女のハラキリ	5
大川端心中	10
肌の感覚	16
おっぺけべえ	22
怪気の原因	26
ボートで洋行	31
貞奴の義侠	37
東洋の女侠	41
切腹の宣伝	45
金作りの為	53
女のコロニー	58
南北戦争払下げ銃	64
娘ごころ	69
奥羽越同盟	75
嫁して日浅く	80
新潟港奪還	86
会津若松城下	90
落花狼藉の巷	94
明治元年冬	100
カリフォルニア	104
女ないちんガール	110
からゆきさん	
逢い見ての	
身売りの話	

お勘が安南（ベトナム）人の志士と匿れていた
パリ第九区下水道入口をセーヌ河より写す

お勘の行方……………	241	バタビア航海……………	126
アンクルトムの作者……………	234	砲筒の響き……………	131
メリケン裁判……………	228	赤旗の信号……………	135
男の走馬燈……………	222	ランプ・レディ……………	139
夜風・汐風……………	217	白地に赤く……………	143
丁半勝負……………	211	女の凱旋門……………	147
子を入質に……………	206	モンマルトの丘……………	151
海女のあわび……………	201	馬庭念流道場……………	154
女股旅仁義……………	196	真忠組騒動……………	159
ジャベル警部……………	187	君のは太い……………	164
パリ地下水道……………	183	初夜の儀式……………	168
やまとカンカン……………	178	船は出てゆく……………	173
義をみてせざるは……………	173	安南の志士たち……………	183
女の意地……………	190	義をみてせざるは……………	178
		やまとカンカン……………	183
		ジャベル警部……………	187
		パリ地下水道……………	190
		女の意地……………	196
		女股旅仁義……………	201
		海女のあわび……………	206
		子を入質に……………	211
		丁半勝負……………	217
		夜風・汐風……………	222
		男の走馬燈……………	228
		メリケン裁判……………	234
		アンクルトムの作者……………	241

1 女のハラキリ 川上貞奴

大川端心中

「……女ってえのはねえ、相手の男はんが好きか嫌いかは、眼でみた様子が良いの好もしいの、といった判断なんかめじゃないんだ」

吊された軒忍の緑色へ眼をやりながら、姉芸者の巴ともよがそんなことをいいだした。

だから、まだ半玉に出たばかりの奴は、きよとんとした顔になり、おちょぼ口で、

「だったら……何処で判るんですの姐さん」

恐る恐る聞き返して耳を澄ました。すると巴は切れ長な眼で、ちらっと奴の方を見据えるようにしながら、くすつと含み笑いして、

「肩だよ……手の指先なんだよ」

己れのきやしやな割りには、丸味をもった肩を捻るようにしながら、よくしなう透き通りそうに白い手をつき出してみせぐつとそらせた。

「まあ……姐さん。好き嫌いは心……胸のところで決めるんじゃないやありませんの……」

まるで頬げたを叩かれたように顔をしかめて、十四歳の奴は、すこしそこだけ柔くなりかけの、己れの胸のところへ指を這わせた。

「何いってんだい、子供だねえ……眼でみて頭で考え、それから胸で思い腹で決めるなんて……そんな廻りくどいのは、そりゃ殿方のやる事で……女ってえのは男とは違うんだから、面倒くさい厄介な事は抜きなんだよ」

巴は瘦せぎすの身体にびったり着つけた紅明石べんめいせきの、胴をねじるように団扇うちわを使い、また濃緑のきしのぶの軒忍のきしのぶを見上げながら、

「おまえだつて……その内に一本になりや、身にしみるくらい判つてくるだろうよ……」

とはいつたが、まだ下地したつ子のおまめから半玉になったばかりの奴が、食いつきそうなつぶらな眼を向けているのに気づくと、

「いやだね……そう話に乗ってきちゃあ」

と、紫双むすつ蝶の団扇で口許を隠しつ、

「よくさあ……女つてのは環境きやうきに馴れやすいから、どんな男だつて亭主にしたり旦那にもつたら、やがてその内には、情が湧き心も移つてきてなんとか巧くゆくもんだ……なんて話をきいたことがあるだろ……だけどね男と女の情つてものは、湧いたり浮いて出てくるばうふらみたいな、そんなもんじやないんだよ……いいかい、ひとに瞞まかされ泣きを見るんじゃないよ……覚えておおき」

「へえ……」と、親切に教えられているのは判るから、奴はぺこりと頭を下げた。すると、

「まあ、とんだお説法をしちまつたね、だけどさ……女の性さがとか業ごうなんて、まあ、そんなもんなんだよ……」と巴は微笑んでみせてから、

「いいかい……いくら何んでもないつもりで殿御だつて、手を握られたとき腋の付け根までびりつときたら、それ迄いくら好きそうな御方であつても、あくまで拒みたいものが身体の芯にはあることだし……もし肩へなんか向うの手が触れられ、背筋がびりつとしたり、すうつと嚙かが腰のあたりから上つてくるようなら、相手が優しくて親切なおひとでも、どうしても女は駄目なもんなんだよ……」

「まあ、肩と手先で……相手が好きになれるか嫌いなのかの区別が……それでつくんですか」

「そうなんだよ……女つてのは男とは生れつき出来が違うんだ。襟の処に心の琴糸こといとが走っていたり、ひとよつては脇腹や脚にもそんな感ずる個所があるもんだ。だから頭で考えて判断するなんて、ひち難かしい厄介なことをしなくたつて、触ったり触られたりで、ずばり初めから決つてしまふんだ」
「まあ……」いわれた奴は、己れの両手で、まだ引き締つたわが身の肩や腰を、そつと撫ぜ廻してゐたが、情けなさそうな声をだし、

「あたい……姐さん駄目なんです……何処も同じで、別に何も感じないみたいです」

低い声で訴えてくるのに巴は嫣然えんぜんと、

「ばかッ……自分で自分に触つてみたつて判るもんか……誰か男はんにさわつてお貰いな」

と笑つてしまつたが、それに續けて、

「だけど用心おし……初めは触られても厭や氣もせんと、こりゃ芯惚れの相手だと想つていても、女は我儘なもので、ある日急にぞくつとしてきて、それで厭やになつてしまふ事だつてあるんだよ——いいかい」念を押すように口をとじた。

下から船頭が、八ツ手の葉越しに、

「おまつとうさん……姐さん乗つておくんなさいまし」と、猪牙ちよきの仕度ができたのを、丁度知らせてきたからである。

さて、新橋の船宿芝新からは、汐留橋の下を潛りぬけ大川端を、猪牙船はすいすい水すましのよう

に直線に上つてゆくのだが、船頭が、
「姐さん……今日はどうしなすつた。ふさぎの虫なんですかい」と氣にとめ、声を掛けてくるくらい
巴は放心したみたいに、舷側から水の流れを眺めそこへ目を釘づけにし、一言も口をきこうとはしな

かった。そこで、

「……姐さん」

一緒についてきた奴も脇から声をかけたけれど、船宿の二階で余りにしゃべりすぎ顎でも痛くなつたのか、ずっと奴はてんで何も云わずだった。

二人して柳橋の亀清の座敷をすませ、帰日も芝新の猪牙船で置屋へ戻る筈だったが、さて柳橋の舟つき場へ、どうしたわけか何時までたっても、巴の姿はみえなかった。

「ちよっと一足先に……と云いなすって姐さんは先に出たまんま、どうしたんだろ」

心配して奴は一人で氣をもんだが、

「おおかた座敷が平で、すうっと抜けられたのをよい事に、巴姐さんは好きな処へでもしけこみ、さつさと用をすませ今頃は、もうとつくに駕籠でも拾って帰りなさったんだろ」

船頭は酔いも甘いも噛み分けたような、そんな口調でいい放つと、

「いつ迄待っていても埒もねえ……行きやすぜ」もやい綱をとき舟を出してしまった。

次の日。まだ昼前だというのに、

「大変だ、大変だ」と箱屋の若い衆が血相変えてとんできて、置屋のかあさんの許へ、

「……この巴姐さんが岡惚れしていた書生っぽと身投げしたのが、大川橋へあがったんだそうだ」
と急いで知らせにきた。

「……新橋芸者のくせに、なんで他所土地でそんな馬鹿をしたんだらうね」

小梅膏を額の際にはったかあさんは、いらいらして金切り声をはりあげ、

「これッ、奴……おまえをつけてやったのに一緒に帰ってこないもんだから、こんな事になつてしまつたんだ」と、手にしていた長煙管の雁首のところ、商売ものの顔は避けたが襟筋をたて続けにぴしぴし叩かれた。

そこへ、芝新の昨夜の船頭が恐縮しきつて、揉み手をしながら顔をみせ、

「おつれしたんだから戻りも、探して何故つれてこなんだと、散々にうちの女将から叱言^{かす}をくいまして」と膝小僧を揃えて頭を下げ、

「いま舟をもつてきやしたから大川端までお伴しやす……どうも、おたくの商売ものを台なしにし御損をかけ済みやせん。勘弁しておくんないまし」と詫びを入れてきた。

しかし逆上気味の置屋のかあさんは、

「あたしや死人なんか見にゆくのは真つ平だねえ、昨日一緒だったおまめを連れてきな」

きんきんした声をはりあげた。奴も恐かったが、また煙管で叩かれ折檻されるよりはと思ひ、船頭の後について猪牙へのりこんだ。

が、大川端まで行ってみると、身投げだと駆けこんできた箱屋の知らせは間違いで、蕙を被せられた足首の処から血がたれて、地面が黒ずみ、そこへ銀蠅や黒蠅が、まるで蚊柱みたいに渦をまいてもう舞っていた。

奴が恐る恐る蕙をめくつて巴の死顔を覗いてみると、顎から頬へかけて反り血が飛び、それが、もうかさぶたのように固まつていた。

船頭と一緒に、巴の屍体だけでも持ち帰ろうとしたが、見張りの邏卒が、どうしても、「検屍が済むまでは下げ渡せん」の一点ばりなので、やむなく奴は手拭を川端で濡らしてきては、こ

びりついた血の塊をそつと上からふやかした。

そして、まるで死首の化粧でもするように、固まったのを剝がしつゝ手拭で何度も巴の顔をこすりあげ、男の屍体と一緒に並んだ奴は、ずっと群がる蠅を坐りこんだまゝいつまでも追っていた。

肌の感覚

向島の大倉喜八郎別邸は、見晴しの良さと設備が整っている点では、亀清あたりの座敷とは比べものにならないし、それに人目にもつかなかった。だから伊藤博文や山縣有朋なども、微行でここへきては接待をうけていた。

なにしろ料理は上野のすえ花やあげ新から板前が出向いて腕を振い、酒間の幹旋は新橋から綺麗どころが呼ばれてくるのである。

が、お客が飲んで遊びにくる所が、必ずしも芸者が嬉しがって行く御座敷ではない。

なにしろ普通の料亭待合なら、前もって一応は平座敷か、それとも枕席にはべるのかの段取りもあって、置屋の方でもそれなりに人選して送りこむ。また行つてからでも、そうした所なら、嫌やなら嫌やで、お帳場や女中頭に頼んで、他からの御座敷をかけて貰つたりして、うまく逃げられる算段もある。

しかし向島の別邸は、そうした青楼^{おきや}ではないので女将も帳場もない。だから一旦、「お今晩わ……」と入ってしまったら最後、もう後は二進^{にうち}も三進^{さうち}もゆきはしない。

「もう帰つてもよいぞ……」と、声が掛る迄は二日でも三日でも、勝手気儘には出てくるわけにもゆ

かなかった。そこで、他にお約束のある妓や別に馴染客の多いのは、

「……かあさん、向島だけは、いくら御祝儀をはずんで下さっても、融通がきかないから勘忍して」と、あまり行きたがらない。

そこで、どうしても、いつも白羽の矢は、

「奴……おまえ行っておくれでないか」

となってしまう。大川端で姉芸者の巴に死なれた後、その埋め合せみたいに急に一本にされてしまった奴は、何をいわれても丸抱えの身ゆえ、

「……はい、はい」というしかない。

そこで云われる儘、まるで向島の別邸へ詰めきりの恰好で通わされている内に、

「……おう、可愛い顔をしてるじゃないか」

廊下のすれ違いに無雑作に声をかけられたのが、川上音二郎との出逢いだった。

その頃の川上は政談演説で何度も拘引されて都落ちし、大阪へ行つて落語の前座を勤めたり、堺の寄席で、書生仁輪加などしていたが、それでは食してゆけず出京したが、これといった職もなく、

「えっ、儘よ、かくなる上は、敵の粟を奪つてもつて吾が糧にせん」の意気込みで、自由党の壮士から大倉喜八郎の用心棒になり、この向島の別邸へ居候兼見張番で転りこんでいた。

だから、新橋からくる芸者など高嶺の花みたいなもので、かねて川上としては無縁の存在に思っていたのだが、縁は異なるものというが、奴の顔が自分の好みの型だったので、つい呼びとめてしまったのである。

ところが千葉の貧乏漁師の家に生れて、父親が遭難した後、借財のかたに半玉に売られ、むりやり

に、一本にされての苦勞のしずめで、それに貧乏性に生れついている奴は、声をかけられた途端、にっこり微笑するなり川上へ、

「……爛^{らん}ざまし、集めてくるんですの……」

と、色氣のない返事をしてしまった。

というのは、別邸の別棟にごろごろしている書生たちは、若い奴を使いやすいとみてか、いつも廊下などで出逢うと、

「客の呑み残しの爛^{かん}徳利の中身を、厄介じゃが一つに集めておいてくれんか……濟まんが頼まれてくれろよなあ」

と小声で囁かれていたから、てっきりそのつもりで答えてしまったのである。

処が、川上は首をふって、

「おりゃ……そんなさもない事はいわん」

さつさと大股で廊下を渡っていつてしまった。だから、奴としては当てがはずれ、

「けつたいな書生さん」そんな風に思った。

だから他のとは、それからは区別するようになって、庭園などで出逢つても、奴は慎しやかに黙礼をするようになった。

その日。

といつても、もう庭園のガス灯が青くともつていた頃だが、悪戯半分に若い奴は玩具^{おもちゃ}にされて酔わされてしまい、堪えに堪えていたが、どうにもならなくなり、庭先へおりて椿の花が咲きみだれている植込みの蔭で、冷たい風に当たっていると、

「……どうした」川上が側へ寄ってきた。

そして覗きこむと背後へ廻って、

「苦しいのか」と背をなぜおろしてくれた。

「はい……」吐きそうなのを辛抱している処ゆえ、口数すくなく答えたが、撫ぜられると胸のむかむかするのがすこしずつとれてきた。

(……親切なひと) そう思うようになった。

だから、それから三日程たって、別棟の入口に立っている川上をみつけ、礼をいうつもりで側へよってゆくと、いきなり、

「……どうだい、今夜」

あっけらかんな誘われ方をされてしまった。

ぶつきら棒すぎて答えようもなく、ぼんやりしていると川上は、首を挟むような具合に奴の肩を両手で叩くというより押さえた。

いくら相手が川上でも普通ならば、芸者とみてお安く云わないでよと、剣もほろろにやり返す処だが、頸筋を叩かれたのが、ぞくつとせず変な話だが胸へわくわくしてきて、

だから奴は変な気がして、貝口から白い腕を突きだしてのぞかせ、川上に、

「ねえ、握って……」ともちかけてみた。

「なんだ、脈膊でも可笑しいんか」

天ぶらの金時計の蓋をばちつとあけ、川上はもっともらしく握ったが、
「大丈夫じゃ、ちゃんと脈は動いとる」

「そう……」答えながら奴は身体を硬らせていた。腕の付け根はびりつとこないが、脚の方へでもきて、やがて内腿の辺が痙攣しないかと、皮膚を突張らせたままそんな感覚をまっていたのである。

が、いくらたつても足の裏にも何も響いてこなかった。だから奴は、思わず、

「……変だわ」と呟やいた。すると川上は、

「何がだ……」と摺んでいた手首を引張り、ぐっと左腕で抱きかかえてしまい、

「俺はせんから……お前が好きだったんだ」

浮いている頸動脈の間に吹きこむようにいつてのけた。奴はのけぞって、

「く、くすぐりたい」別に何んともなかったが、わざとそんな声をだしてみた。すると、

「……こいつめ」川上は、その耳許へ、

「……どうせ今晚、何人かは泊りになるんだろ……お前も戻らんと、俺の部屋へこい。裏階段を上って突き当りだ。間違えるな」

というなり、突き離すようにして、

「……誰かくる。人目につく……」

渡り廊下をさっさと大腿で歩いていつてしまった。

その後姿を見送りながら奴は、

（変だ、あのひと……）思わず呟いた。

というのは、着崩れする位に強く抱きしめられたのに、別に澱^おりみたいな不快さが、いつものように肌から浮かんでこなかったからである。

だから、まるで暗示でも掛けられたみたいに、云われる儘に帰りに一人だけ外^{はず}れて、教わった裏階

段を昇っていった。

が、それでも、まだ気になるのか、

「ねえ、御願ひ、もう一度、肩を……」

凭れかかるようにしなだれ掛った。

「なんだ肩凝りか」

川上は大きな手をのばし、奴の肩の付け根を揉みだした。じつと眼をとじて、肩胛骨から背柱へ吹き抜けてゆくものが、空々しくないのをよく確めてから、そのまま肘をずらし、

「……ねえ、抱いて」

震えるように、そんな声をおずおずだした。

「うん……」

川上は太い腕をのばして、まるで柔道の羽交^は交^が縮^{ちぢ}めのように、ぐっと力をいれてきた。

だから、奴はもだえて、

「痛い、もっと優しく……」

と注文をだしたが、といって左程までに不快でも苦痛でもなく、抱かれた肩から腰に向って、まるで電気が放射状に走るみたいな感じで、ぞくぞくと燃え上ってくるものを肌で味わっていた。それゆえうっとりとしてしまい、

「……強く、もっときつく」今度は違うことを口走ってしまい、

（……触られても、握られても、こんなに強く抱きしめられても、ちっとも厭^わな愛^あのでてこぬこの人こそ……本当に巴姐さんが死ぬ前に教えていってくれた相惚^あれの人なんだ）